HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「幽鬼の街」小樽を歩く－ 伊藤整の「坂」にまつわる感覚的表現 －
著者	武田，佑希子；TAKEDA，Yukiko
引用	年報新人文学(20)：88-111
発行日	2023-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[論文]

「幽鬼の街」小樽を歩く

―伊藤整の「坂」にまつわる感覚的表現―

武田 佑希子

一　はじめに

本稿は、北海道小樽市ゆかりの作家・詩人であり文芸評論家でもある伊藤整（一九〇五～一九六九）が書いた小説「幽鬼の街」を取り上げ、作品に対して新たな一解釈を示すものである。

「幽鬼の街」の物語は、小樽駅前から始まる。十数年ぶりに東京から小樽の街に舞い戻った主人公・伊藤ひとし（第一書房版以降「鵜藤つとむ」に改変）は、小樽駅前から海の方へと歩いて行く途中、かつて恋愛関係にあった女性・百枝（第一書房版以降「久枝」に改変）に遭遇した。彼女から逃れるように小樽の街を彷徨するうち、百枝のほかにも主人公がこれまで離郷とともに関係を断った女性たちや、

友人、さらにはかつての自分などが次々と亡霊になって主人公の前に現れ、次第に小樽の街全体が、亡霊が跋扈する幽鬼の街になっていく。主人公は窮地に追い込まれながらも幽鬼の群れに飛び込み、それらを掻き分け「生きなければならない、ここを過ぎて生きなければならないと私は思っていた。」と決意し、物語は第二部の「幽鬼の村」へと続いていく。

初出は雑誌『文藝』昭和一二年八月号で、翌年の昭和一三年に雑誌『文学界』にて発表された「幽鬼の村」と併せて、昭和一四年に第一書房から『街と村』として刊行された。初出時には、主人公が〈伊藤ひとし〉という名前で登場するが、これは作者・伊藤整の本名（整と書いて「ひとし」と読む）である。さらには、小樽高等商業学校時代の先輩〈小林多喜二〉や親友〈川崎昇〉も本名で登場し、また建物の名前なども実在のものが採用されている。このことから、先行研究では「幽鬼の街」の自伝的要素[1]に着目して私小説として評するもの[2]や、私小説として扱うことをあえて避けて論ずるもの[3]、また新心理主義文学の観点から、伊藤整が永松定、辻野久憲とともに翻訳を行ったジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』との比較[4]などのアプローチがとられてきた。

ところで、「幽鬼の街」において特徴的なのは、雑誌『文藝』での初出時のみ本文内に挿入された作者による手書きの地図「小樽市街中央部図」である。この「小樽市街中央部図」は、初出時には八頁目に一頁分のスペースを使用して横向きに掲載された。東西南北の東（海側に面している）を上にして、物語に登場する「拓殖銀行」や「第一大通」など、実在の建物名や通り名がそのまま地図にも反映されている。

曽根が、「この作品の構造上の一つの大きな特徴は、さまざまな固有名詞で組み立てられた小説だとい

う点にあった」と言うように[5]、初出の『文藝』掲載時、主人公を含め人名は、原則として実名で登場していた。しかし、『街と村』として第一書房より出版された際に、人名・建物名が改変された。その改変と同時に、作者による手書きの「小樽市街中央部図」も省略されてしまった。そして、初出時以降の版では省略されてきた自筆の地図であるが、新潮社版『伊藤整全集』において再録されたものの、「月報」への掲載にとどまり、本文の途中に差し込まれるといった初出時と同じ形式での掲載はされていない。つまり、初出以降の版では、読者は初出時と同じスタイルでは本作品を読むことができないのである。

この「小樽市街中央部図」が削除された件[6]について、玉川は「この作品の初出と単行本、全集再録でたびたび言及されるのは登場人物名表記の改変で、（中略）自筆地図の削除はさほど気に掛けられなかったように思う」と言及している[7]。

その一方で、主として人文主義地理学の見方に立脚しながら、この小説における場所や空間の持つ意味を解釈する研究も進められてきた。たとえば、日高はその嚆矢で、それまでの私小説の方法論的な読みに対して、昭和初期における商業都市小樽の風景に着目し、地形のアップダウンを物語の展開と照らし合わせて解釈するなど、「幽鬼の街」の舞台となった場所の持つ意味を考察した[8]。また、渥美は、伊藤整にとっての小樽は「記憶のなかの小樽」であり、その空間の象徴性を地図化したものが「小樽市街中央部図」であるという[9]。この渥美の指摘に対して、岡本は「この地図の有無に関わらずとも、「幽鬼の街」には地図的思考が内在していると言うことはできるだろう」と「小樽市街中央部図」を重要視していないものの、「幽鬼の街」には「小樽」に対する二つの空間認識が描かれており、一つは伊藤整が経験した記憶のなかの小樽、もう一つは主人公である「私」の歩行を通して視認された小樽であるという[10]。

前者の「記憶のなかの小樽」は、渥美と同様の指摘であり、それは「小樽市街中央部図」として表現されているため、その地図の分析を通じて、伊藤整の空間認識に迫ることができよう。その一方で、主人公が彷徨した小樽という起伏に富んだ立体的な都市空間に対しては、地図の分析とは異なる分析手法が必要である。この点に対する「幽鬼の街」への新たなアプローチとして、佐藤・平居は、歩くことで深める作品批評の実践を「文学紀行」と呼び、フィールドワークを重視する姿勢を打ち出している[11]。

そこで本稿では、作者・伊藤整が「幽鬼の街」で描いた小樽の都市空間を、現実の場所の地理的特徴と比較することで、作者の意図を探り、作品に対して新たな一解釈を提示したい。実際に、小樽でのフィールドワークや、コンピュータを使って空間分析を行う地理情報システム（略称：ＧＩＳ）を用いた分析を通じてテクストに描かれた都市空間の理解を深めることで、これまでに言及されてこなかった「幽鬼の街」における伊藤整の感覚的表現を見つめ直していく。

二　地域概観と研究方法

二―一　小樽の地域概観

小樽市は北海道の西部の日本海側に位置し、東西が約三六キロメートル、南北が約二〇キロメートルと東西に長い市域を成している。南東部は石狩市や札幌市と接しており、北は日本海に面している（図1）。最初に市街地が形成されたのは信香町付近であったが、港湾の整備が進み、入船町との二極を拠点として発展していき[12]、そして明治二〇年代後半から色内町～手宮町にかけて大規模な埋め立てが行

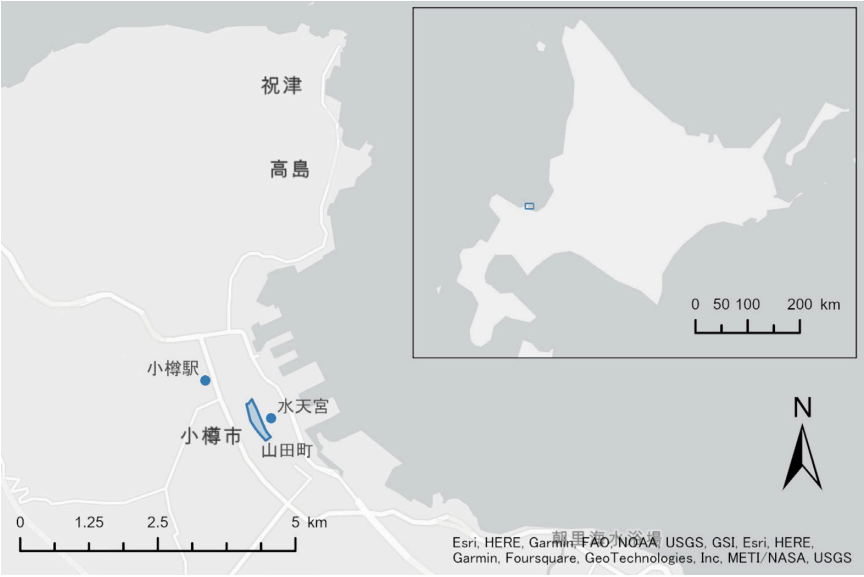

図１　小樽市地域概観図

われたことで、石炭積み出し施設の整備や船舶の大型化が進み、明治三〇年代には国際貿易港に指定される[13]ほど急速に発展していった。

明治中期以降の日清戦争、日露戦争における石炭需要の増大に加え、やがて道内の農林産物や人の流れを支える港湾都市となり[14]、小樽経済は全盛期を迎えた。明治後期には全国屈指の経済都市、港湾都市としての地位を確立し[15]、大正三年に着手された大規模な市街中心部の海岸埋め立てにより小樽運河が誕生した。

「小樽区」が市制施行により「小樽市」になった大正一一年は、伊藤整が小樽高等商業学校に入学した年でもある。昭和時代を迎えてもなお小樽の好況は続き、昭和一二年にはこれまで札幌会場と共催だった〈北海道大博覧会〉が小樽単独会場となった。この年の〈北海道

大博覧会〉は五〇日にわたって開催され、同年八月に伊藤整の「幽鬼の街」は雑誌『文藝』に掲載された。

そして、小樽市は昭和初期にかけて大手銀行の支店進出が相次ぎ、色内地区は「北のウォール街」と呼ばれるほどの一大ビジネス街となった。それらの建物の多くは当時の欧米の最新技術を取り入れた大型建築であり、多くが現在も残っている。また、小樽運河は昭和四〇年代からの大規模埋立て計画を受けて、市民による「運河保存運動」が展開された。その結果、折衷案として一部埋立て工事が採用され[16]、現在では銀行建築と併せて小樽を代表する観光スポットとなっている。

二―二　研究方法

伊藤整が描いた「小樽市街中央部図」は、市内が網羅的に描かれているわけではなく、「幽鬼の街」を読むにあたって必要な情報を伊藤が抽出して描いたいわば主題図である。小樽市立小樽文学館には、この地図のレプリカに、「幽鬼の街」の主人公が小樽駅に降り立ってから巡ったルートの道順が記されて展示されている。これに加え、現実の空間と物語に描かれた空間との対応関係を分析するためには、主人公のたどったルートを現実の小樽の空間、具体的には大正末期～昭和初期にかけてのより詳密な地図を用いて、どの角を曲がったか、どの道を通ったかといった検証が必要となる。

そこで、本稿ではＥＳＲＩ社が提供するＧＩＳアプリケーションＡｒｃＧＩＳを用いて、大正一四年に発行された「大日本職業別明細図」上に、主人公の行動の軌跡を再現した（図2）。具体的には、紙地図をスキャニングしてデジタル化した画像データに、位置情報を付与するジオリファレンスと呼ばれる空間情報処理技術によって現在の地図上に重ね合わせたのち、「幽鬼の街」の本文中に登場する場所（図

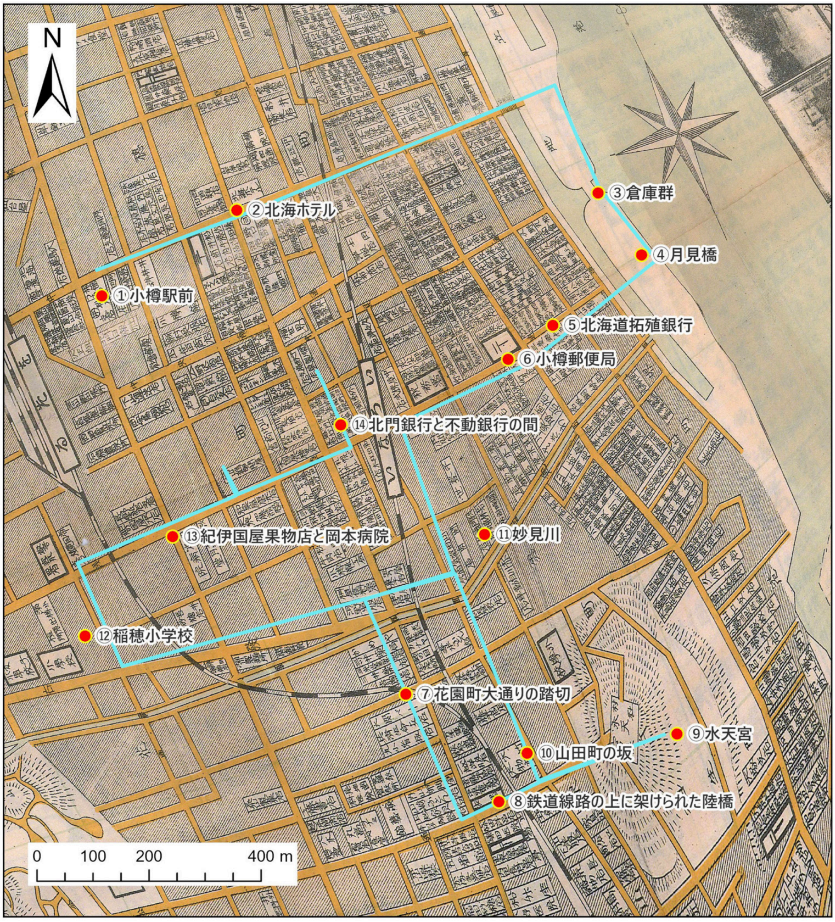

図２　「幽鬼の街」主人公の彷徨ルート　基図は大正一四年発行の「大日本職業別明細図」

2中の赤い点）や主人公の彷徨ルート（図2中の水色の線）を書き加えた。場所やルートの特定にあたっては、筆者による単独の現地調査のほか、市立小樽文学館や小樽市総合博物館、内山景一朗氏（元伊藤整文学賞の会運営委員）ご協力のもと現地調査を実施した[17]。

三　分析

三―一　伊藤整と小樽の関係

伊藤整は、明治三八年に北海道松前の炭焼沢村（現・松前郡松前町）に生まれ、翌年忍路郡塩谷村（現・小樽市塩谷町）に移住した。小学校を卒業した後、大正六年に旧制北海道庁立小樽中学校（現・北海道小樽潮陵高等学校）と小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）で青年期を過ごした。卒業後は、小樽中学校の教諭となるものの大学進学を目指し、昭和三年東京商科大学（現・一橋大学）入学を機に上京した。東京に移住したのちに、青年期まで過ごした小樽の街を描いた小説が「幽鬼の街」である。

倉西が「作中の現在時に安易に寄りかかって読み進めていくならば、時間の中の『私』を見失ってしまい困惑してしまうであろう」と指摘しているように[18]、「幽鬼の街」で描かれている小樽の街並みは、それぞれ同時に存在しうる景観ではない。昭和一〇～一一年頃の「幽鬼の街」執筆当時の小樽の姿であり、また伊藤整が高商時代を過ごした大正末期の頃でもある。つまり、場面や場所によって時代が異なるのである。

その具体例として、冒頭の百枝の台詞を参照する。

――あらまあ、伊藤さんぢやないの。あなたいつ小樽に来たの。随分久しぶりねえ。もう何年になるかしら。さうさう、あれは芥川さんや里見さんなんかが講演にいらした年だから、大正十五年だつたかしら。いや昭和二年かも知れないわ。もう十何年つて経つてるわねえ。あたし年とつたでせう」(改造社『文藝』より)

これは物語の序盤、主人公・伊藤ひとしが北海屋ホテル前で百枝と遭遇する場面である。百枝によると、講演があった大正一五年〜昭和二年から一〇年以上経過していると話しているので、伊藤整が「幽鬼の街」の原稿を書き上げた昭和一一〜一二年[19]を物語の「現在」と仮定するとおおよそ計算が合うことになる。しかしながら、物語の後半ではこの会話に出てくる一〇年以上前の講演会を、冒頭から続く同じ時間の流れの中で、主人公が会場に赴き聴く場面がある。

このようにして、「幽鬼の街」で描かれた小樽の姿は、単純に現実の一時期の小樽に当てはめて対応させることができない。加えて、執筆時の昭和一一年頃の小樽は〈北海道大博覧会〉開催を目前に控え、小樽駅前には博覧会を歓迎する塔や会場には近代的な建物が建ちはじめていた頃であるが、「幽鬼の街」にはその様子が一切登場しない[20]。

このように、自らの青年期を過ごした過去の小樽と、執筆時における現在の小樽を混淆させながら、地図とともに実際の地名や建物名を頻出させることによって、小説内のフィクションの小樽に現実味を与えているといえよう。「小樽市街中央部図」を含め、「幽鬼の街」には伊藤整が「描きたかった小樽」が

投影されているのである。

三―二　伊藤整の「坂」にまつわる表現と現実の小樽の「坂」

伊藤整の「幽鬼の街」の創作メモ[21]には、地図のラフスケッチがあり、場所の名前とそれぞれの地点に番号が振られていて、主人公が巡るコースの構想の足跡がみられる。ストーリー進行のため構想の段階であらかじめ想定した全ての地点を通過することを前提とすると、必ずしも効率の良い歩き方をしていないことがわかる（図2）。というのも、物語内で主人公がたどった道順を元に、実際に小樽の街を歩くと「この角はさっきも通った気がする」と思うタイミングが何度かあったためである。その後、地図上で主人公の彷徨ルートを確認すると、やはり主人公は同じ交差点を違う方向から二度通ったり、遠回りをして同じ通りに戻ってきたりしていた（図2の⑪妙見川付近など）。この緻密に練られた彷徨のルートが、幽鬼からの逃亡に現実味を与えている。そのうえ、特筆すべきは小樽の街を特徴づける「坂」の傾斜に対する伊藤整の感覚的表現である。小樽市は、もともと丘陵部を切り開き住宅開発が行われてきた背景があり、坂が多く、斜度二四パーセントを超える急坂も存在する[22]。小樽＝坂の多い街であることを念頭に読み進めていても、その坂がどれほど「急」なのか、「ゆるい」といってもどの程度か、イメージするところは読者に委ねられている部分が大きい。しかし、小樽の街を実際に歩いたのち再び「幽鬼の街」本文に立ち戻ると、坂が立体的なイメージをもつ。

「幽鬼の街」の先行研究における坂の描写については、日高、林がそれぞれ以下のように述べている。

小樽はそういう「街」である。「坂」の上と下、「大通り」と「路地」、その上昇と下降の感覚および明暗二つながらの対照は、この「街」をさながら《地獄めぐり》に誘う感受性の誘導路とするにふさわしい[23]。

この下降運動は、物理的に小樽の街を下ることであり、また象徴的には地獄へと下る旅でもあるのだが、心理的に過去へと遡行する動きでもあって、自分の内面へ沈潜する下降運動とも解釈できる[24]。

このように、「幽鬼の街」における坂は、主人公が坂を通過する際の上下運動と主人公の意識や内面との関係性について議論されてきた。しかしながら、先行研究において、「幽鬼の街」に登場する坂の表現について着目し、現実の小樽の坂と照らし合わせ、伊藤整自身の感覚的表現について論じているものは管見の限り見当たらない。

そこで、本稿では本文から坂の描写を含む文章を抽出して、比較検討を行った。引用文中、下り表現は下線、上り表現は破線で表した。また、上り下りの表現がないものに関しては、地理的情報から判断した。

A　膚寒く曇った日であった。私は小樽駅前の広い坂道を、海の下の方に向って行った。

B　私は久枝についてその路地裏を歩き、停車場通りへ出て、海の方へ歩いて行った。だらだら坂に

なって踏切りがある。

C 私は空っぽの線路を見やってから、更に埋立地にむかう急な坂を下りる。

D それから二人はものを言わないまま街を横切り、小樽郵便局の低いくすぶった建物に沿って坂をのぼって行った。

E 私は莫迦のような顔をして、キ呉服店の角で左方に橋を渡り、花園町第一大通のゆるい坂を公園通りの方に向って登っていった。

F そう言いながら、私たちは花園町第一大通の角をつっきって、鉄道線路の上に架けられた陸橋を渡り、家並の間の坂道を次第にのぼり、石の鳥居をくぐり、やがて胸を突くような高い白い石段を攀登って行った。

G 私は夢中で、そのうちの数の少いあたりに突進し、(中略) 蹴破って一目散に妙見川にむかって、山田町のだらだら坂を駆け下りた。

H 私は暫くそこに佇んでぼんやりしていたがやがてぶるんと頭を振って、あ、これから講演会へ行くのだったと思い直し、また高商通りの坂をのぼって黒ずんだ板張りの木の陸橋をわたり、稲穂小学校の厖大な木造二階建ての校舎の正門に入って行った。

I 小樽駅構内の南端にかかっている陸橋浅草橋をわたり、第一火防線に沿うて組合教会の前をすぎた。そこから坂は急になり、道は紀伊国屋果物店と産婦人科岡本病院の木造二階緑色ペンキ塗りの建物の前をとおった。

以上、九か所の坂にまつわる表現を列挙したことで、主人公は先行研究でも述べられているとおり、坂を上ったり下りたりしながら小樽の街をめぐっていたことが確認できた。さらに、坂の表現に関して気がつくことがある。それは、「だらだら坂」という言葉が二度用いられていることである。『日本国語大辞典』によると「だらだら坂」は「傾斜がゆるく長く続く坂」とある[25]。フィールドワークでは、港へ続く〈B・停車場通り（現・中央通り）の下り坂〉は、緩やかな傾斜で確かに「だらだら坂」という印象だった。一方、〈G・山田町のだらだら坂〉は、水天宮前の公園通りから妙見川の方へ向かう下り坂で、今回の「幽鬼の街」をめぐるフィールドワークでは比較的傾斜があるように感じた場所であった。

「幽鬼の街」の本文中に「だらだら坂」という表現が登場するのは、この二回のみである。そこで、二か所の「だらだら坂」に加えて、坂の傾斜に関する描写があるものの中から、傾斜に緩急の形容が付いた〈E・花園町第一大通のゆるい坂〉、〈F・家並の間の坂道（中略）やがて胸を突くような高い白い石段〉[26]、〈I・小樽駅構内の南橋にかかっている陸橋浅草橋をわたり、（中略）そこから坂は急になり〉の三か所を含めた計五か所を取り上げ、それぞれの坂の断面図を描いて坂の傾斜を可視化した（図3、図4）。なお、Cについて「急な坂」とあるが、手宮線廃線による道路工事によって昭和一二年ごろまでの様子と現在の道の傾斜が異なる[27]ため除外した。断面図の作成にあたっては、国土地理院提供のウェブ地図である地理院地図の「断面図」機能を用いた。図3の各矢印は、主人公の進行方向を示している。また、図4は五か所すべて水平方向の幅を三〇〇メートルに設定した上で縦横比をそろえ、主人公の進行方向に基づいて左側を始点、右側を終点とした。

断面図を比較すると、〈B・停車場通りのだらだら坂〉は、図4〈坂B〉の断面図の赤矢印の区間（水

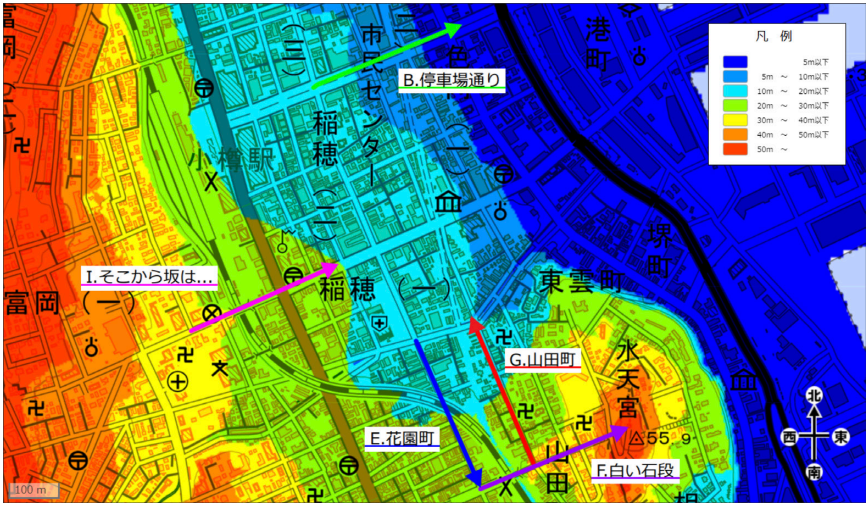

図３　傾斜の程度について描写のある坂

基図は地理院地図「自分で作る色別標高図」より作成。また、図中の矢印は主人公の進行方向を表し、その長さは図４の各断面図の範囲に相当。

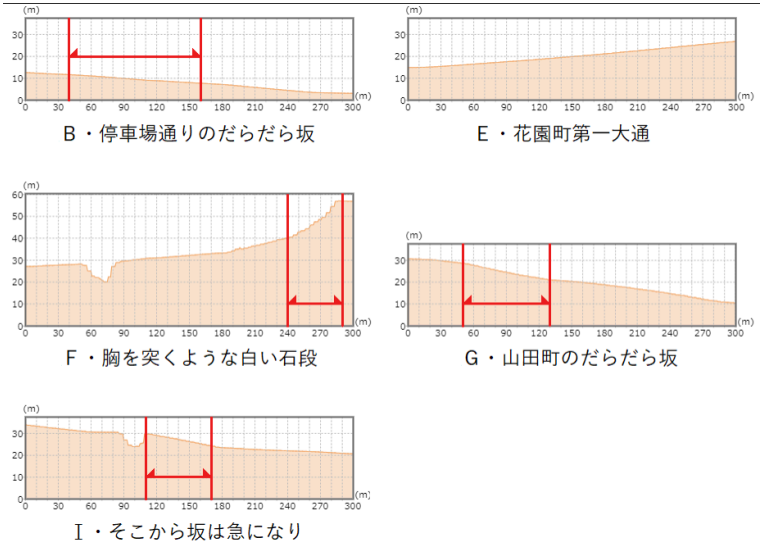

図４　断面図を用いた坂の傾斜比較

断面図は地理院地図「断面図」機能を用いて作成。坂の番号と断面図の範囲は図３を参照。

平距離一二〇メートル）に該当し、高低差四メートルもない緩やかな坂で、〈E・花園町第一大通のゆるい坂〉（三〇〇メートルの間に高低差約一二メートル）と同程度の傾斜であるのに対し、〈G・山田町のだらだら坂〉は三〇〇メートルの間に高低差が約二〇メートルとなっている。〈I・そこから坂は急になり〉の「そこ」とは「小樽市街中央部図」や「大日本職業別明細図」によると図4〈坂I〉の断面図の赤矢印の区間（水平距離六〇メートル）に該当し、その間の高低差は五・六メートルであり、赤矢印の区間の前後と比較しても本文の表現通りであることがわかる。また、〈F・胸を突くような高い白い石段〉（図4〈坂F〉の断面図の赤矢印の区間に該当）は、五〇メートルの間に高低差が一七メートルあった。「胸を突くような」との表現の通り、比較した五つのうち一番傾斜が大きい部分だった。

以上の断面図の結果を基に〈坂B〉と〈坂G〉の二つの「だらだら坂」を比較してみたい。〈坂G〉の方が〈坂B〉に比べて傾斜が大きく、その差は約二倍である。また、〈坂G〉の傾斜の方が、「ゆるい」と形容された〈坂E〉よりも約一・六倍大きい。加えて、フィールドワークの際に〈坂G〉が比較的傾斜のある坂に感じたこと、〈坂G〉には部分的に傾斜が急な場所（図4〈坂G〉の断面図の赤矢印の区間に該当）があることからも、〈坂G〉の実際の傾斜と、「だらだら坂」という感覚表現との間には齟齬があると言わざるを得ない。

四　考察

前章では、「幽鬼の街」本文内で登場する坂に関する記述のうち、坂の傾斜の程度について読み取ることができる五か所について、地理院地図の「断面図」機能を用いて実際の坂の傾斜と表現とを比較した。この比較によって、伊藤整は「幽鬼の街」において、五か所のうち四か所については、実際の坂の傾斜に則した表現を用いていたが、そのうちの一か所〈G・山田町のだらだら坂〉は、実際の坂の傾斜とは異なる感覚表現を用いていることがわかった。

本章では、なぜ伊藤整は山田町の坂の状況により忠実な「急」ないし「きつい」といった表現ではなく「だらだら坂」としたのか、本文に立ち戻りその理由について検討していきたい。

まずは、主人公が山田町に入っていく場面を引用する。

（前略）私はその会場である稲穂男子小学校へ行こうと心をきめ、鳥居の少し先から右へ折れて山田町へ入った。

そこへ一歩入った時、私はしまったと思った。油断をしていて私は最も怖しい幽鬼どもの群棲地に飛び込んだのである。この通りは灯がとぼしく、店々の店頭には男たちや女たちや、子供、労働者、死人、さまざまの人間の着古した、薄汚れて光っている着物が、首吊りのようにゆらゆらと揺れて並んでいた。こんな時山崎登がいてくれたら何よりも気強いのだがと思って振りかえったけれども、彼はそこにいなくって、入ったばかりだと思うのに古着街山田町は、私の後方に終りもなく続いて、

通路をふさぐように両側から着物の群がせまり合っていた。もう前へ進むほかに仕様がなかった。

「幽鬼の街」における山田町は、物語内の地理的な最高地点である水天宮から物語の終盤の地である稲穂町方面へと向かって下っていく最中にある。「幽鬼の街」の先行研究においても、山田町については水天宮から転げ落ちた先にあり、緻密な計算のもと「山田町」が地獄への落下の舞台として選ばれているとの指摘がある[28]。若かりし頃の山崎登（初出・川崎昇）に慰められたのち、再び一人で歩き始めた主人公はポスターで見かけた「文学大講演会」を見に行こうと、稲穂小学校へ向かう。山田町はその通過点でありながら、「最も怖しい幽鬼どもの群棲地」として表現され、次々と迫りくる大勢の古着の幽鬼たちの姿は、物語一番の山場といえるだろう。

この山田町は、本文内で「古着街」と形容されている通り、明治三二年に刊行された『小樽港史』には「山田町は古道具商を以て占領す」と記されており[29]、牛山は山田町の特色ある商店街形成が興味深いとして、昭和三年と昭和八年の二度、山田町の坂の両側に立ち並ぶ商店について調査した[30]。牛山は「山田町と言えば直ちに古着商街を連想し、山田町は恰も古着商街の別称の如く小樽市民の脳裡に馴染している」と紹介した。また、牛山の作成した山田町の商店分布図によると、伊藤整が「幽鬼の街」を執筆した時期に近い昭和八年時点の古着商は一九軒あり、その五年前の昭和三年は二七軒であった。中には古着屋が三～四軒隣接している場所もあり、「幽鬼の街」において山田町の「だらだら坂」から古着の幽鬼が押し寄せる様子は、大正～昭和初期の小樽における実際の山田町を知る読者にとっても、山田町＝古着の街を連想させるに難くないものだったことがわかる。

そして、主人公がこの山田町の坂を下っていく様子を描写しているのが、以下の引用の部分である。

するとその店の奥から畳まれてあった無数の古着がむくむくと起きあがり、ざわざわという衣摺れの音を立てて私の方へ押しよせて来るのが見えた。（中略）私は夢中で、そのうちの数の少いあたりに突進し、海中の昆布かなにかのように手応えのない彼等を押し倒し、蹴破って一目散に妙見川にむかって、山田町のだらだら坂を駆け下りた。

ここでは、主人公が古着の幽鬼たちから逃れるように山田町の坂を駆け下りていく様子が描写されている。ここで注目したいのは、表現として「だらだら坂」と「駆け下りた」という二つの言葉の組み合わせである。

通常、急な坂であれば、たとえ逃避という行為が伴っていなくとも、下っているうちに自然と駆け足になってしまうものである。しかし、そこをあえて急な坂のイメージとは対照的な「だらだら坂」という表現を用いることで、駆け下りたのは坂の傾斜に起因するのではなく、幽鬼からの逃避という主人公の意思によるものであることが意図されているのではないか。主人公にとって、この山田町は稲穂小学校で行われる講演会に参加するという意思をもって歩き始めた通過点である。主人公の目的が明確化されていない彷徨から始まった物語が、「最も怖しい幽鬼どもの群棲地」にて幽鬼たちに飲み込まれ、生きることをあきらめるのではなく、最終的には「生きなければならない、ここを過ぎて生きなければならないと私は思っていた。」と決意するクライマックスへと向かっていく。伊藤整は山田町の坂をあえて

「だらだら坂」と表現することで、幽鬼からの主体的な逃避行動を際立たせたのではないかと考えられる。小樽の街に対する描写の正確性を重要視しながらも、各場面における時間の操作や幽鬼の登場など、文学作品であるからこそ成立しうる「小樽の街」の姿を恣意的に描いた片鱗が、この山田町の「だらだら坂」にも現れているのではないだろうか。

五　おわりに

以上、本稿では、坂の傾斜やその表現について、フィールドワークと地理情報システムを用いて現実の小樽の街と作品「幽鬼の街」とを比較することで、作品に対して新たな一解釈を提示した。

まず、伊藤整と小樽の関係についてまとめ、伊藤整が「幽鬼の街」執筆に際し、どの程度現実の小樽を意識しながら書いたのか、また「幽鬼の街」に描かれている現実の小樽とは、いつの時代のものであるのかを分析した。先行研究でも指摘があるが、改めて本文と「小樽市街中央部図」から、「幽鬼の街」に描かれている小樽は、ある特定の一時期に限定された小樽の姿ではないことを再確認した。

次に、フィールドワークの結果をもとに、「幽鬼の街」本文から坂にまつわる文章を摘出し、そこからさらに坂の傾斜に関する表現が用いられている部分を取り上げ、地理院地図の「断面図」機能を用いて比較した。物語内の坂にまつわる表現と実際の傾斜を比較したことで、伊藤整はたいていの坂について実際の傾斜に近い表現を採用しているにもかかわらず、山田町の「だらだら坂」に関しては、実際の山田町の坂とは異なる傾斜の表現を用いていたことがわかった。

この山田町の坂の地理的特徴と伊藤整の表現との相違に関しては、「幽鬼の街」において最大の山場ともいえる「最も怖しい幽鬼どもの群棲地」である山田町からの逃避を、より劇的なものにするため、伊藤整による印象の操作があったと考える。作者が物語の場面ごとに時代設定を変化させていたことを鑑みると、この恣意的な街の姿の改変は、伊藤整が「描きたかった小樽」を描くためであったといえよう。

伊藤整が小樽中学校を入学してから上京するまでの大正中期～昭和初期にかけて過ごした記憶の中の小樽、「幽鬼の街」執筆当時の小樽に加えて、物語内で主人公の逃避行の舞台に適した地形に変化させた小樽の混成により生まれたのが「幽鬼の街」小樽なのである。

付記

本稿は、北海学園大学一般教育科目社会科学特別講義として二〇二二年度新たに開講された「ＧＩＳ現地調査基礎」において、小樽市を対象に一泊二日のフィールドワークを行った成果を、ＥＳＲＩ社が提供するウェブアプリケーション「ストーリーマップ」を用いてまとめ、その後、さらに調査を重ね、二〇二三年五月一八～一九日に開催されたＥＳＲＩジャパン主催「第二〇回ＧＩＳコミュニティフォーラム」マップギャラリーコンテスト「ストーリーマップ部門」に出展したもの（作品名：「幽鬼の街」小樽を歩く―伊藤整の坂表現と小樽の街の今昔―）（図５、図６）をもとに、加筆再構成したものである。

（たけだ　ゆきこ・文学研究科日本文化専攻修士課程一年）

図５　「第 20 回 GIS コミュニティフォーラム」マップギャラリーに出展した作品の表紙

図６　マップギャラリーに出展した作品の QR コード
（https://arcg.is/1WOfL50）

［註］

（1）伊藤整は「分裂にまたがる（自作案内）」（『文藝』六―七、改造社、一九三八年）にて、「この作品は心理的には告白になってゐるが、現象的には決して私の自傳でない」としている。

（2）平野謙『現代作家論』南北書園、一九四七年。

（3）尾形大「現実と幻想の間―伊藤整「幽鬼の街」の構造―」（『文藝と批評』一〇―二、二〇〇五年）。

（4）林和仁「伊藤整とジョイス―都市小説としての「幽鬼の街」と「ユリシーズ」―」（『神戸女学院大学論集』三七―二、一九九〇年）。

（5）曽根博義「「幽鬼の街」序論」（『國語と國文學』六六―五、至文堂、一九八九年）。

（6）地図削除の経緯について、作者による言及は現在のところ見つかっていない。市立小樽文学館亀井志乃館長と学芸員玉川薫氏のご教示。

（7）玉川薫「伊藤整「幽鬼の街」と小樽の地図」（北海道立文学館『「地図と文学の素敵な関係」図録』、二〇二二年）。

（8）日高昭二「『幽鬼の街』私註」（『伊藤整論』有精堂、一九八五年）。

（9）渥美孝子「記憶地図から物語へ―伊藤整における〈幽鬼〉と『ユリシーズ』―」（江頭彦造編『受容と創造―比較文学の試み』宝文館出版、一九九四年）。

（10）岡本亮「『幽鬼の街』論―認識過程論序説―」（愛知教育大学大学院国語教育専攻編『愛知教育大学大学院国語研究』八、二〇〇〇年）。

（11）佐藤義雄、平居謙「伊藤整『幽鬼の街』の小樽―文学紀行という方法 ―」（平安女学院大学国際観光学部編『国際観光学研究』二、二〇二二年）。

(12) 岡本哲志『港町のかたち―その形成と変容』法政大学出版局、二〇一〇年。
(13) 高橋伸幸「物資の大集散地「小樽」の変遷」(山田安彦、山崎謹哉編『歴史のふるい都市群・4―東北地方日本海側・北海道の都市―』大明堂、一九九〇年)。
(14) 小樽市市制施行一〇〇周年記念誌編集委員会『小樽市一〇〇年の歩み』小樽市、二〇二二年。
(15) 小樽市「小樽市歴史文化基本構想」第二章小樽市の歴史文化の概要 https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020101500085/file_contents/otarusi-rekisibunka-kihonkousou-2.pdf (二〇二三年一〇月一二日閲覧)。
(16) 菅原慶郎「小樽の歴史」(醍醐龍馬編『小樽学』小樽商科大学出版会、二〇二三年)。
(17) 二〇二二年一一月一三日のフィールドワーク(単独)ほか、二〇二三年七月二三日のフィールドワーク(単独)、同年九月九日の内山景一朗氏による座学(市立小樽文学館にて)、同年一〇月二三日の内山景一朗氏の解説による街歩き(市立小樽文学館主催)。
(18) 倉西聡「『街と村』論―幻視の風景―」(『文藝と批評』六―二、一九八五年)。
(19) 前掲注(1)。
(20) 市立小樽文学館亀井志乃館長のご教示。
(21) 伊藤整の当該の創作メモは現在、日本近代文学館に収蔵。
(22) 前掲注(15)。
(23) 前掲注(8)。
(24) 前掲注(4)。
(25) 北原保雄ほか『日本国語大辞典』(第二版、小学館、二〇〇一年)「だらだら坂」の項。

(26) 内山氏のご教示によると、白い石段は現在残っておらず、社務所内に白い階段があった頃の写真が残っている。筆者が写真を確認したところ、傾斜に大きな変化はないと判断した。

(27) 内山景一朗氏のご教示。

(28) 前掲注(8)。

(29) 高畑宜一『小樽港史』一八九九年。

(30) 牛山喜「小樽市の古着商街」(『地學雜誌』四―一〇、東京地学協会、一九三三年)。

※作品の本文引用について、特記のないものはすべて新潮社版『伊藤整全集』を使用した。